〝主体〈わたし〉〟続考

―説話と表現（5）―

竹村信治

前稿（「〝主体〈わたし〉〟考」本誌第41号、一九九八年三月）においては、存在論的な〝主体〟を自己同一的で自己完結的自足的な構築物として考えたり、〝自我〟を自己に関する自律的な意識として一元的にとらえるわれわれの慣習をとりあげ、これを、敗戦直後の〝近代〟への自己同定をめざす〝主体性論争〟が称揚した、〝主体〟もしくは人間の存在性をめぐる共同幻想に媒介されたものとしたうえで、それにかわる〝主体〟観として、他者と自己との境界ごとに生成し、そこでの対他的な「内的体験」、あるいは世界に流通している〝他者の言葉〟（バフチン。＝諸言説）の参照・選択をもって形成され更新されつづける、被媒介的で継起的な〝主体〟の存在性を指摘しておいた。さらに、明治・大正初期に出来した〝主体〈わたし〉〟の様態として、他者としての近代化（このもとでの西欧啓蒙思想）との境界でこれが宣揚する自立的個我を内面化した〈わたし〉をとりあげ、また一方、その〈わたし〉が自立的個我を内面化しつつ単独者としての位置どりに固執するなかで、個の居場所を非社会的脱社会的に他者の外部に確保すべく国家や家という名の他者と対峙し拮抗していったところに生成し形成された〈わたし〉にも注目し、その過程でつくりだされていった境界がこの期における個や個人主義（含む、エゴイズム）をめぐる諸言表の産出されたトポスだったことにもふれた。そして、そうした観察のうちに、他者との境界で他者との関係を通じて生成する〝主体〟なるものの存在性を確認し、さらには他者（あるいは〝他者の言葉〟）の内面化もしくは外部化を内容とする「内的体験」、これらを通じて形成される〈わたし〉たちの諸相を提示、概観した。

ところで、このような確認や概観に筆をついやしたのは、そこでものべたとおり、説話と表現をめぐる課題、とくに説話の言語過程において行われていることや起こっていることへの理解をもとめてのことであった。説話を話題についての話題、つまりテキストに対するメタテキストの位相にあるものとしてとらえ、のべきたった〝主体〟観に立脚するとき、話題をよみ、かたる言語営為は、そのメタ化の現在、すなわち他者としての話題とむきあう境界で、話題との対話を通じて〝主体〈わたし〉〟が生成し形成されていく過程とともあるということになろう。そしてこの、話題をよみ、かたるさなかで生成し形成される〝主体〈わたし〉〟は、言語機構をめぐるこれまでの議論に即していえば、よみの場

面では〈読者〉〈聞き手〉、かたりの場面では〈話者〉〈語り手〉としてその相貌をわれわれのまえにみせるというわけだが、そのそれぞれは、

○〈読者〉＝他者（話題）との対話の間に、いまひとつの他者としての〝よみの場〟（現代においては、たとえば教室）をも考慮しつつ、これらへの応答として、世界に流通する〝他者の言葉〟（＝諸言説）から言説を選択し、〈聞き手〉にこれに即した読解の遂行を託す主体。

○〈聞き手〉（読む主体）＝選択付託された言説に即して読解を遂行する主体。

○〈話者〉（発話主体）＝他者（話題）との対話の間に、いまひとつの他者としての〝かたりの場〟をも考慮しつつ、これらへの応答として、世界に流通する〝他者の言葉〟（＝諸言説）から言説を選択し、〈語り手〉にこれに即した言述の遂行を託す主体。

○〈語り手〉（語る主体）＝選択付託された言説に即して言述を遂行する主体。

として、他者（話題）との境界で、あるいは〝よみの場〟〝かたりの場〟との境界で、それぞれ被媒介的に、言説とふかくかかわりつつ形成されている〈わたし〉にほかならない。さらに、実体的な言語行為者としての説話の享受者・発話者は、それぞれよみの場面で生成した〈読者〉（これを介して〈聞き手〉ひいては言説）やかたりの場面で生成した〈話者〉（これを介して〈語り手〉ひいては言説）と対話する位置にあるが、そこでもまた、それらとの対話を通じて〝主体〈わたし〉〟があらたに／あらためて生成し形成されているということになる（これについては、拙論「説話の言述ー『宇治拾遺物語』から」〈『説話論集・第7集』所収、一九九七年一〇月、清文堂刊〉、参照）。

ここまで四回にわたって稿をかさねてきた本論文のねらいは、説話の表現を、話題内容ばかりではなくそのメタ化の現在における言述の行為性（欲望や権力性）またその言語過程における出来事性（〝他者の言葉〟を介した他者＝話題・〝よみの場〟〝かたりの場〟との対話とこれらへの応答のあり様、そこで発見されている問題領域）の位相において問おうとするところにあるが、このようにみてくると、その行為性や出来事性ひいては表現性は、説話の言語過程での対他的な〝主体〈わたし〉〟の生成、形成の様態をも視野にいれながらこころみられることが必要となろう。

＊

さて、叙上の見とおしのもと、これまで、他者との境界での対他的な「内的体験」を通じて形成される〈わたし〉の諸相を概観してきた。

・他者とそれが内属する言説を内面化（主体化）しつつ形成される〈わたし〉

・他者をまえに、既有のもしくはあらたにであった〝他者の言葉〟（＝言説）を賦活あるいは参照・選択しつつ形成される〈わたし〉

・他者あるいはそれが内属する言説の外部化をこそ希求するところに形成され、個の居場所を他者の外部にもとめ、単独者

としての位置どりの確保に固執しつづける〈わたし〉がそれだが、本稿では、さらにいまひとつの〈わたし〉の肖像を瞥見しておきたい。それは、ほかならぬ、他者の内面化と外部化とを両極とする線分上を往還しつつ、また〝他者の言葉〟（＝言説）の賦活や選択をもためらっている〈わたし〉のすがた、いわば他者との境界で生成する〝主体〟の原像として、いまだ〈わたし〉の像をむすべずに境界線上を宙吊りのまま彷徨しつづける、マージナルな〈わたし〉の相貌である。

●三太郎という〈わたし〉

ところで、明治・大正初期、とくに前稿でとりあげた芥川龍之介「鼻」（一九一六＝大正五年一月二十日脱稿〈手帳1・見開き3〉、同年二月一五日刊『第四次・新思潮』創刊号＝第一年第一号）の出現前後をみわたすとき、この期の他者との境界線上に出来する〝主体〈わたし〉〟の様態をこのうえない明瞭さでつたえているテキストとして、いまさらめくが、阿部次郎『三太郎の日記』をみいだすことになる。

『三太郎の日記』は、はじめ「明治四十一年〈一九〇八年、稿者注〉から大正三年正月に至るまで、およそ六年間にわたる自分の内面生活の最も直接的な記録」（自序）として一九一四（大正三）年四月東雲堂から出版された。そして、翌年二月に続編〝第弐〟（岩波書店刊）が出、さらに一九一八（大正七）年六月、〝第壱〟（一部雑録削除）〝第弐〟に〝第参〟（大正三～六年の間に執筆された文章）を加え、〝合本〟（岩波書店刊）として刊行された。漱石の門に出入りする前年（25歳）から漱石の死の翌年（34歳）にいたる都合十年間に阿部が新聞雑誌等に発表した文章の集成で、「自分の心から愛し心から憎んでいる過去のために墓誌を書いていやりたい心持ちで」編集したという（第壱・自序）。

おさめられている文章を「墓誌」といい「自分の内面生活の最も直接的な記録」としている以上、標題の「三太郎」とは阿部にとっては彼自身のことということになるが、本稿の議論に即していいかえれば、これは他者との境界で被媒介的継起的に〈わたし〉を生成しつづけた個にあたえられた名にほかならない。したがって、本書は明治末年から大正前期において三太郎という個において生成し形成されつづけた〈わたし〉たちの「記録」＝「墓誌」ということになる。

勿論、すでに西田幾太郎『善の研究』（一九一一年）和辻哲郎『ニイチエ研究』（一九一三年）があり、漱石「現代日本の開化」（一九一一年講演）「私の個人主義」（一九一四年講演）がきかれ、「鼻」発表の年の一月には個人主義・人格主義に共感し新カント主義哲学をまなんでカント的理想主義の立場にたった朝永三十郎が『近世に於ける「我」の自覚史』を発刊、また同月吉野作造が、以後まきおこるデモクラシー論争の着火点となった「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」（『中央公論』）を発表したなどの事実にてらせば（この間の思想動向については、橋本峰雄「近代的世界観の哲学的形成」〈『近代日本社会思想史Ⅰ』有斐閣、一九六八年〉、松沢弘陽「自由主義論」〈『日本通史』18、岩

波書店、一九九四年〉にくわしい)、『三太郎の日記』に状況のすべてを代表させるなど到底できるものではない。しかしながら、朝永どうようカント的人格主義理想主義にもとづいて〝普遍的自我〟を説き、大正期の教養主義的風潮をかたちづくっていった阿部、また本書が当時の言論界に好意的にうけいれられ広範な読者の共感を獲得したこと(これについては角川選書『合本三太郎の日記』〈一九六八年〉付載の井上政次「解説」参照。なお以下の引用は本選書版による)などをも勘案するならば、そこにしるされる内観や自己凝視のあり様は、この期に生成し形成された〝主体〈わたし〉〟の一斑をつたえるものとして、十分参照にたえるもののようにおもわれる。

三太郎という個に生成した〝主体〈わたし〉〟の「記録」「墓誌」としての『三太郎の日記』。その〝主体〈わたし〉〟は、第壱と第弐と第参とにおいて、「それぞれ多少の内容的特質がありそれらの間に進展関係が見られ」、「その特質なり進展なりはかなりかすかで緩慢なところからして、時には立ちどまったり逆方向へ揺れ返ったりする気配の個所も無いではないが、大きく見れば、そういう進展なり特質なりは目についてくるのである」(前掲、選書版「解説」)と評される。

井上によれば、その「進展」はつぎのようにたどられる。

○第壱…三太郎の自己病患の自己翻弄(=自己と真の生との喪失の詠嘆)と、それを経て辛くも達した自己救出の凄愴なる内生の記録。

○第弐…救出された自己とその生を「実在」たらしめ、根源的生命へと近づかしめ、真に実りある永遠的主体「霊」へと自身を近接せしめようとし、悪ー本能に動かされる刹那的興奮と浮誇と嫉妬と散漫と虚脱とが徐々に征服されて、それに代って永遠と普遍と充実と肯定と愛が、「霊」と「神」とのものが、いくらかずつ自分自身のものとなっていった、その間の記録。

○第参…社会的関心、倫理的要求、他人の幸福への顧慮のもと、所与的の人間性の無限の超克を課題とし、自己の「霊」「神」「実在」への近接とともに他人をも同じ道に救出しようとする理想主義の道の提示。

これは三太郎自身のいう〝自我〟の三分類に対応している(合本「奉仕と服従」一九一七年六月〜八月)。

○個体的自我…他と差別することを本義とする個体的存在としての自我。「おのれ」。

○現実的自我…普遍的自我を包蔵する個体的自我、個体的自我に繋縛せられたる普遍的自我。

○普遍的自我…「おのれ」に繋縛せられざる普遍的自我そのもの(井上注「自律的自由創造的主体者そのもの、神そのもの、仏そのもの」)。

〝普遍的自我〟は〝超個体的自我〟とものべられ、「他と局限し合うことを必須とせざるもの、自己の獲得するところは自と他と共に所有するがごときもの、他の所有を悦ぶことによって自己もまたその所有にあずかるがごときもの—約言すれば個体的局限をこえたる超個体的の自我」(同右)と説明される。ここにカント

的理想主義、人格主義への共鳴をきくのは簡単なことだろう。そしてそこからは三太郎の〈わたし〉の履歴、すなわち、かつて第壱・自序で、

自分の思想は、自然についても、自己についても、静かに深い客観性を欠いた少年の厭世主義が主調をなしていた。しかもこの厭世主義を自己に適用するにあたって、自分は解剖の一面にのみ熱して、開展に向かう努力の一面を忘れがちであった。

とかえりみ、「自分は今自分の内生が徐々として転向しつつあることを感じている」（同右）とのべた〈わたし〉が、第弐「遅き歩み」（一九一四年五月二八日）で、

すべての生活において、自由と自発とを重んじて、圧迫と強制とを反撥する意味からいえば、俺は現在といえども「自己の権威」の主張者である。（…中略…）しかしこのことは自分にとってはもはや自明の真理となった。俺は今繰り返してこれを思索し、これを主張しているほどの内面的必要を感じない。俺の中心問題はいつの間にか「自己の権威」から「自己の内容」に転移していた。（…中略…）しかし今俺はほぼその途を会得したと思う。

自己をみたす者は客観的、形而上学的、宇宙的、人類的内容でなければならない。実在の中に沈潜することは徹底的の意味において自己の空疎を救う唯一の方法である。こう考えると共に「自己」の問題は、「自己」の問題を究竟の境まで推し詰めて行くために、必然的に「実在」や「神」や「真理」や「愛」の問題に移らなければならなかった。（傍線、稿者。以下同。）

とのべ、やがてカントの代弁者となるにいたったすがた、いいかえれば、他者との境界で「自由と自発とを重んじて、圧迫と強制とを反撥」して「自己の権威」を主張した〈わたし〉が、「自己の空疎」につきあたって「自己の内容」に関心をうつしその開展の途＝「自己の空疎を救う」「方法」をもとめつづける〈わたし〉となり、この過程でカント（＝〝他者の言葉〟）にであいこれを内面化する〈わたし〉へと変異し、人格主義、理想主義の言説に準拠した言表を再生産するにいたった、そうした三太郎という個の〝主体〟の変転、〈わたし〉の相貌の履歴をうかがうことができる。

この変転と履歴は、おそらくは明治末年から大正前期にいたる日本人の〝主体〈わたし〉〟のそれにおおくかさなるとみられるが、こうして、青田三太郎は、阿部次郎という個と他者との境界で生成されつづけた〝主体〟の、その境界の一々での対他的な「内的体験」を通じて形成されつづけた〈わたし〉たちの変貌をつたえ、被媒介的継起的に生成、形成される〝主体〈わたし〉〟の実際をたしかめさせる。

しかし、ここで問題にしたいのは、人格主義、理想主義言説の内面化をはたして〝普遍的自我〟をとく三太郎についてではない。そうではなくて、むしろそこにいたる過程、すなわち〝個体的自我〟〝現実的自我〟を依然としていき、「自由と自発とを重んじて、圧迫と強制とを反撥する」「自己の権威」の主張者でありつつ、

その一方で「自己の空疎」をおもいなやんでいる三太郎の相貌、そしてそこからの開展の途＝「自己の空疎を救う」「方法」をもとめながら〝他者の言葉〟の内面化の手前で逡巡し、なお他者との境界での宙吊りの位置にふみとどまりつつ他者や〝他者の言葉〟との拮抗のなかでの「内的体験」をいきている三太郎の〈わたし〉相貌、そこにこそ光をあてておきたいのである。

●〝主体〟の原風景

〝他者の言葉〟の内面化のてまえで宙吊りの位置にふみとどまる〝主体〟。そのあり様は、右にひいた第弐「遅き歩み」と同じ日に書かれた「形影の問答」（第弐）、とくにそのなかのつぎの自問自答がよくつたえる。

○君はこれまで感心に自分の卑しさに堪えてきた。（…中略…）そうして君は理想と現実の間に横たわる距離に対して、誠実な、敬虔な、鋭敏な感覚を失わなかった。（…中略…）しかるに君もとうとう待ち切れなくなったとみえて、昨今になってついに一足飛びをやったようだ。自分の醜い現実を端視する勇気が、これまでの張りを失ったために、これまで活潑に働いていた距離の感じが少し曇りを帯びてきたようだ。（…中略…）君の思想には一つとして新しいものがない。君の中心思想は自己超越の要求にあるようだが、それはカントの根本悪の思想や、ヘーゲルの自然に対する精神の思想や、オイケン（…中略…）、ニーチェ（…中略…）などに、実に雄大に表現されているじゃないか。（…中略…）理想に対する君の解釈は要するに一通りの倫理学者並みで、何の新しみをも持っていない。（…下略）

○僕は新しくても古くてもいいからただ本当の生活をしたいのだ。本当の生活ができるようにいろんな人から導いて貰いたいのだ。（…下略）

これは、さきにひいた「遅き歩み」における〈わたし〉、すなわち「自己の空疎」のみたされた「本当の生活」を〝普遍的自我〟への志向のうちにみいだそうとしていた〈わたし〉と、これに対してそうした志向は「誠実な、敬虔な、鋭敏な感覚」の喪失、あるいは「待ち切れなくなった」「一足飛び」なのではないかと糾弾する〈わたし〉との問答である。「誠実な、敬虔な、鋭敏な感覚」とは、他者との境界で〝個体的自我〟〝現実的自我〟にしがみつきながらしかも「自己の空疎」をなやみわぶ〝主体〈わたし〉〟の、その宙吊りの感覚をのべたものだろう。「一足飛び」は、この宙吊りの位置をすてて、カント、ヘーゲル、オイケン、ニーチェなどの〝他者の言葉〟によって自己超越をはたそうとすることをいう。それは〝他者の言葉〟を内面化して〝普遍的自我〟を志向する〈わたし〉のこと。そしてここは、そうした〝他者の言葉〟による「自己の空疎」の補填が、一方で他者との境界を消去し、他者に対する「自己の権威」の喪失をみちびくことへの危惧をのべたものでもあろう。

このような危惧は、大杉栄「個人的思索」（一九一六年）にもつぎのようにみいだされる。

個人的思索の成就があって、始めて吾々は自由なる人間となるのだ。（…中略…）いかに自由主義をふり廻はしたところで其の自由主義そのものが他人の判断から借りたものであれば、（…中略…）思想上の奴隷である。

大杉は、家や国家などの制度的な外部の強制力ばかりでなく、「他者の判断」「思想」を内面化することによって自分をしばる場合にも、個の「奴隷」状態は出来るのだという。

〝他者の言葉〟の内面化を否定する大杉の〈わたし〉、「本当の生活ができるようにいろんな人から導いて貰いたいのだ。」と〝他者の言葉〟にすがろうとした三太郎の〈わたし〉。両者の言表は対蹠的だが、他者との境界での宙吊りの位置で、さらにまた〝他者の言葉〟（自由主義や理想主義）との間に線引きしつつその言説との境界でも宙吊りになっている点、両者のうちに生成している〝主体〈わたし〉〟はおなじ位相にあるものというべきであろう。ここには、明治・大正前期の、〝他者の言葉〟の内面化と「自己の権威」の確保のはざまで自問自答をくりかえす〝主体〈わたし〉〟のすがたとその内生（＝「内的体験」）のかたちをみとめることができる（なお、大杉の〝自由〟論および、かれが、後年の阿部などによる人格主義、理想主義の提唱によってみちびかれた大正教養主義を、この立場から「知的奴隷状態」として否定していたこと、しかしこの大杉の〝自由〟の主張は、徹底性において大きな魅力をもったが、国家だけでなくあらゆる組織を拒否する無政府主義の傾向のゆえに社会的な影響力をもちえなかったことなどについては、石田雄『日本の政治と言葉』上〈東大出版会、一九八九年〉にくわしい）。

他者および〝他者の言葉〟の外部にあって「自己の権威」を確保しようとする〈わたし〉と、〝他者の言葉〟を内面化して「自己の空疎」を補塡しようとする〈わたし〉と。三太郎に表象されたここでの阿部の〝主体〟は、この二つの〈わたし〉のはざまを生き、両者にひきさかれつつ両者の間を往還する。その、二つの〈わたし〉の間を往還する〝主体〟の様態は、〝主体〟なるものの原風景とも称すべく、そこで形成された、他者の内面化と外部化とを両極とする線分上を往還し、また〝他者の言葉〟（＝言説）の賦活や選択をためらい、〈わたし〉の像をむすべないまま境界線上を彷徨しているいまひとつの〈わたし〉、すなわち個をとりまく世界との境界で個の存在性をこそ宙吊りのままといつめているマージナルな〈わたし〉の肖像をもつたえていよう。

「形影の問答」は、つぎの詩でむすばれている。

鏡の多い部屋が俺を苦しめる。
今いる部屋がいいのか、
他のもっと暗い部屋がいいのか、
今の俺には本当のことがわからない。
鏡の多い部屋が、
今俺を苦しめている。

ここにきこえるのは、「自己の空疎」の補塡をもとめて〝他者の言葉〟の森を彷徨しながら、一方で「自己の権威」喪失の危惧をいだいてとまどっている〈わたし〉の、その内生において発せられた、〝自己自身〟なるものを同定しかねている三太郎の〈わた

し〉の声。それは、「鼻」テキストからきこえる内供の〈わたし〉の声に、よくにている。

●芥川の〈わたし〉

他者との境界で宙吊りになりつつ〝他者の言葉〟の森を彷徨している三太郎の「内的体験」をもっともよくおしえるのは、第壱冒頭にある「断片」（一九一二年四月二三日）だろう。

俺の心はただ常に動揺している。動揺を予期する念々の不安は現在の静安をもいたずらに脅迫している。一皮むいた下には赤く爛れたさまざまの心が終夜の宴の終局を告ぐる疲れたる乱舞に狂い回っている。重ねていえば、俺の生活は芝居の波である。波の底には離れ離れになった心が、下回りらしい乏しさをもって、目的もなくただもがいている。この動乱こそわが生存の唯一の徴候である。そこには純一なる生命もなく、一貫せる主義もなく、したがってまた真の生活もない。俺の生活はすでに失われた。俺は今眼を失えるフォルキュスの娘たちのように、黄昏れる荒野の中に自らの眼球を捜し回っている。（…下略）

フォルキュスの娘は今もなおかくれんぼうの相手を捜すように、その眼球を荒野の黄昏に捜し回っている。おそらく彼女は永久に眼球さがしの遊戯をやめないであろう。ところは荒野である。時は黄昏である。身は失明者である。捜されるものは失われたる生活である。

ここには、「自己の権威」の主張者＝個の自立をもとめる〈わたし〉が、他者の外部に個の居場所を確保しようとしてそこに「自己の空疎」をみいだし、その「空白」を補填しようとして彷徨しつつみもだえているさまが、あますところなくえがかれている。他者との境界での宙吊りとは、この、「動揺を予期する念々の不安」が「現在の静安をもいたずらに脅迫し」、「離れ離れになった心が、…目的もなくただもがいている」状態、「黄昏れる荒野の中に自らの眼球を捜し回っている」状況をいうのであろう。そしてその絶望は、この眼球（＝自己像／〝他者の言葉〟）さがしが「遊戯」と観ぜられていること、しかもこの内観の記録自体が作為としてしりぞけられてしまうところにある。

『『嘘つけ、嘘つけ』という囁きが三年前と同じく、サラサラと走るペンのあとから、雀を追う鷹のように羽音をさせて追いかけて」きて、〝書くこと〟にも絶望する三太郎の〈わたし〉。

書くということはAn-sich（本然？）が生きて動くということではなかった。Fur-sich（自覚？）の鏡をキラキラと磨くということでもなかった。ただ指の先によだれをつけて、心の隅に積もった塵の上に、へのへのもへじを書くことにすぎなかった。

マージナルな〈わたし〉は書くことによっても「自己の空疎」をみたしえず、「結論は俺には何もわからないということである」と書いて薄笑いをうかべるほかはない。〝他者の言葉〟（人格主義、理想主義の言説）の内面化はこの絶望のはてに、しかも個の単独性の喪失とひきかえに志向されるものとしてある。それはさきに

のべたとおりである。

ところで、こうした三太郎の内生は、「鼻」の内供の内生にほぼひとしい。そのことは、内供の〝鼻〟をフォルキュスの娘たちの〝眼球〟におきかえてみればあきらかだ。彼女たちの「黄昏れる荒野の中に自らの眼球を捜し回っている」すがたは、内供が「積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しよう」とこころみた苦心（＝鼻さがし）になぞらえることができる。そして内供はついに荒療治をうけいれるが、これは〝他者の言葉〟を内面化しようとした三太郎にひとしく、みじかくなった鼻を哂う傍観者をまえにとまどうすがたは、〝他者の言葉〟の内面化への志向を「一足飛び」「何の新しみをも持っていない」と糾弾されてとまどう三太郎とかわりがない。また最後の「長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら」「かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない」とつぶやかれた内言に、「遊戯」（＝鼻さがし＝自己像／〝他者の言葉〟さがし）のはての、「ただ指の先によだれをつけて、心の隅に積もった塵の上に、へのへのもへじを書くことにすぎなかった」との述懐や「結論は俺には何もわからないということである」といった嘆息まじりの声をきくのはそうむつかしいことではあるまい。

こうして、「鼻」テキストは、一九一〇年前後の、他者との境界で宙吊りのままマージナルな個の存在性をといつめている〈わたし〉たちとおなじ〈わたし〉をやどしていると観察される。この〈わたし〉は、芥川の遺稿類、特に「闇中問答」などにうかがえる〈わたし〉との親縁性を感じさせるものだが、それはさらに、「鼻」テキスト出現の前段において生成し形成されていた芥川の〝主体〈わたし〉〟においてもみとめうるものとしてある。以下、新版岩波全集の書簡篇（第17巻）からその肖像をうつしとると―。

○レルモントフは「自分には魂が二つある、一は始終働いてゐるが一つは其働くのを観察し又は批評してゐる」といった。僕も自己が二つあるやうな気がしてならない、さうして一つの自己はもう一つの自己を、絶えず冷笑し侮辱してゐるンだもの、僕は意気地のない無価値な人間なンだもの、それはボルクマンもよみ、ノラもよんだのだから、何故自己の生活に生きないといはれるかも知れない、けれども僕は到底そんなに腰がすゑられない、僕は酔つてゐる一方においては絶えず醒めてもゐる。僕は囚はれてゐる一方に於ては、常に解放せられてゐる。（…中略…）まるで反対なものがいつも同時に反対の方向に動かうとしてゐる。（…中略…）其相搏つてゐる大きな二つの力の何れかゞ無くつてくれゝばいゝ。さうしなければいつも不安である、かうまで思弱るほど意気地のない人間なんだもの。…

（一九一一年〈推定〉山本喜誉司宛書簡〈書簡番号73〉）

○顧ると自分の生活は何時でも影のうすい生活のやうな気がする　自分の烙印を刻するものが何もないやうな気がする　自分のオリギナリテートの弱い始終他人の思想と感情とからつくられた生活のやうな気がする

「やうな気がする」に止めておいてくれ（る）のは自分のvanityであらう　実際かうしたみずぼらしい生活だとしか

考へられない　（…中略…）君の才能の波動を自分の心の上に感ずれば感ずるほど自分の君に対する尊敬と嘆称との念が増して行つたのは当然であらう。独之に止らず自分は屢々自ら顧みて（殊に君以外の人に対してゐる場合に）「自己の傀儡」が「君の思想」を以て口をきいてゐるのを発見した　（…中略…）しかし自分には之が如何にも卑劣に如何にも下等に見えた　口をきくばかりではない　更に進んでは「自己の傀儡」は「君の思想」と「君の感情」とを以て手をうごかし足をうごかした　自分には之が愈下等に見えた（…中略…）けれども自分の行動を定めるものは常に自己でなくてはならない　自分は自分の言動を飽く迄も吟味して模倣と直訳とは必避けなければならないが

かうして尊敬と可及的君の言動と逆に出やうとする謀叛心とが吸心力と遠心力のやうに自分の心の中に共存してゐた…

（一九一三年七月一七日　井川恭宛書簡）

○結婚と云ふのは宇宙に存在する二の実在が一体になる事を云ふのだ（…中略…）二実在が一体をなす為には先其間に愛がなければならない　次いでは其間に円満な理解がなければならない　（…中略…）かうして自己が他人の中に生き又他人が自己の中に生きる落寞とした〝生〟の路はかくして始めて薔薇と百合とに蔽はれる事が出来るのではないか…

（一九一三年八月一一日　山本喜誉司宛書簡）

○自己を主張すと云ふ　しかも軽々しく主張すと云ふ　自分は引込思案のせいかしらねどまづ主張せんとする自己を観たしと思ふ　顧みて空虚なる自己をみるは不快なり　自ら眼をおゝひたき位いやなり　されどせん方なし　樽の空しきか否かを見し上ならでは之に酒をみたす事は難かるべし　兎に角いやなり苦しいものなり…

（一九一四年一月二一日　井川恭宛書簡）

○時々自分のすべての思想すべての感情は悉とうの昔に他人が云ひつくしてしまつたやうな気がする　云ひつくしてしまつたと云ふよりその他人の思想感情をしらずしらず自分のものやうに思つてゐるのだらう　ほんとうに自分のものと称しうる思想感情はどの位あるだらうと思ふと心細い　オリギナリテートのある人ならこんな心細さはしらずにすむかもしれない…

（一九一四年三月一九日　井川恭宛書簡）

○僕は社会に対してエゴイストです（…中略…）そしてその主張の中に強みも弱みもあると思つてゐます　その弱みと云ふのは個人の孤立（イゴイズムから来る必然の帰結としてはないのですが）と云ふ事で強みと云ふのは個人の自由と云ふ事です　僕はこの弱みを―孤立の落莫をみたしてくれるものは愛の外にないと思つてゐます…

（一九一五年五月二日　山本喜誉司宛書簡）

他者あるいは〝他者の言葉〟（＝「他人の思想感情」）との境界で、そこに発生する求心力と遠心力によって宙吊りにされながら、「自己が他人の中に生き又他人が自己の中に生きる落寞とした〝生〟の路」をあゆむほかない〈わたし〉。しかもそこに「空虚

なる自己」をみて身動きもとれず、「個人の自由」とひきかえに個をせめたてる「孤立の落莫」のなかで観念的な「愛」をもとめ、これにもなかば絶望している〈わたし〉。これらがつたえるのはそうした〝主体〈わたし〉〟の様態だ。これに書くことへの不信を吐露したつぎの文言をくわえれば、その相貌はいっそう三太郎にちかづくことになろう。

○さういへば其日記も此頃はやめてしまつた、過去何年の日記は、皆嘘ばかりかいてある。(…中略…) 何故あんな愚にもつかない事を誇張して日記なんていつたらう。…

(一九一一年〈推定〉　山本喜誉司宛書簡。)

○僕はいやになるほど文がまづい　いくらほんとうをかいてる気でもよみなほすとうそとしや思へないやうな語ばかりならべてあるんだ　いやになる…

(一九一四年一一月三〇日　井川恭宛書簡)

○言語はあらゆる実感を平凡化するものです　かうならべて書いた各々の事も文字の上では何度となく私が出合った事のある思想です　しかし何時でもそれは単に所謂「思想」として何の痕跡も与へず私の心の上を滑つて行つてしまひました…

(一九一五年四月二三日　山本喜誉司宛書簡、ただし月推定)

しかし一九一四年一月二一日井川恭宛書簡の末尾には、「今日の手紙は大抵日記よりのぬき書なり」とみえる。書くことへの不信のなかで筆をおくことのできなかった〈わたし〉。これも三太郎とかさなる点であろう。

だが三太郎とことなる点がないわけではない。それは、この芥川という個に生成し形成された〝主体〈わたし〉〟に、「芸術」への「信仰」があったことだ。

○自分は「このもの」の信仰あり　こは「芸術」なり　この信仰の下に感ずる法悦が他の信仰の与ふる法悦に劣れりとも思はれず　すべてのものは信仰とならずんば駄目也 (…中略…) 芸術を実用新案を工夫する職人の如くとり扱ふものは幸福なり…

(一九一四年一月二一日　井川恭宛書簡)

その「信仰」がいかにこの〈わたし〉をはげましささえたかは、さきにひいた一九一五年四月二三日山本喜誉司宛書簡の文言につぎのことばがつづいているところに確かめられる。

○私は多くの大いなる先輩が私より幾十倍の苦痛を経て捉え得た熾烈なこれらの実感を軽々に看過した事を呪ひます (同時に又現に看過しつゝある軽薄なる文芸愛好者を悪みます) そうして一足をそれらの大なる先輩の人格に面接する道に投じた事を祝福したいと思ひます (…中略…) 私は二十年をあげて軽薄な生活に没頭してゐた事を恥かしく思ひます　さうしてひとり芸術に対してのみならず生活に対しても不真面目な態度をとつてゐた自分を大馬鹿だと思ひます　はじめて私には芸術と云ふ事が如何に偉大な如何に厳粛な事業だがわかりました　そして如何にそれが生活と密接に連絡してしかも生活と対立して大きな目標を示してゐるかわかりました

けれども、畢竟するところ、「信仰」は他者との関係の一様式以外ではない。「芸術」もまた他者として、マージナルな〈わたし〉

をあらためて生成する媒体であるほかはなく、さきの引用にはつぎの文言がつづくことになる。

○私にどれだけの創作が出来るか私がどれだけ「人間らしく」生きられるかそれは全くわかりません　唯今の私には酔生夢死しさうな心細い気がするだけです

そして同年五月二日の同人宛書簡には、以下の嗟嘆もしるされている。

○この愛を求めるさびしさがわかりますか　世間と隔離した個性の国に「自分」と「芸術」とのみを見て捗どらない修業道を歩いてゆくさびしさがわかりますか　所詮僕は幸福になれない人間なのかもしれません　この意味で　偉大な先輩の中には不幸な生涯を送つた人が沢山あります　殊にゴッホーしかし僕は幸福になる事を求めます　この愛の浄罪界へはひる事を求めます

こうして、個をとりまく世界との境界で、他者の内面化も外部化もままならず、したがって自己と他者、それゆえ世界の所有をはたすことなくまたそれへの欲望もみたしえず、個の存在性をこそ宙吊りのままといつめているマージナルな〈わたし〉の肖像は、芥川という個において「鼻」テキスト出現前夜に生成し形成されていた〝主体〈わたし〉〟にもみいだされる。それは、「死直前のもの」（『文芸春秋』一九二七年九月号「編輯後記」）という「十本の針」にみるごとく、「或時代の彼自身さへ他の時代の彼自身には他人のやうに見えるかも知れない。」（新版岩波全集第16巻）と〝主体〟の継起性をしり、また「昨年末若しくは今年初のものだらう」（同右）という遺稿「闇中問答」（同右）の末尾で、

芥川龍之介！　芥川龍之介！　お前の根をしつかりとおろせ。お前は風に吹かれてゐる草だ。空模様はいつ何時変るかも知れない。唯しつかり踏んばつてゐろ。それはお前自身の為だ。同時に又お前の子供たちの為だ。うぬ惚れるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

と「僕」によびかけられはげまされている〈わたし〉のすがたに、かさなる点がないわけでもないだろう。そして、そうした〈わたし〉は、「鼻」の執筆時、一九一五年一二月三日の井川恭宛書簡の、

人間の性格と周囲とその他百般の事象にmodify（限定・修正変形、同）される或瞬間と或不可思儀な感情よ情緒よ　それを知る事は学問にも芸術にも出来ない　唯一「生活」するだけだ　唯体験するだけだ

によれば、この、被媒介的継起的な〝主体〈わたし〉〟なるものの存在性を、人間の存在性への洞察として明確に認知していたもののようなのである。（未完）

※続稿は『論叢　国語教育学』5号（広島大学国語教育学研究会、一九九九年三月刊）に掲載した。

（広島大学）